直方体のボックスの中で、お天気ナレーターが天気図を指していた。雲の位置や未だ沖縄海上辺りにある台風に関して、繕った透明な声で説明する。時期に合わせてか格好は青の水着、最近のナレーターはこんな見世物のようなことまでしなければいけないのかと少し同情した。

色々説明していたが、とどのつまり言いたいのは今夜ここらで雨が降るらしいということだった。雨をアピールするためか雨傘を開く。小間には、綺麗な薄水色のあさがおが描かれていた。

とはいえ、今はまだ晴れ模様。ナレーターのバックに映る空だって、夏間近を高らかに知らせるスカイブルー。雲一つ流れていない。奇妙な映像だった。マッチングするものがなにひとつない。

映像がスタジオに帰って来て司会の有名人が話し始めたところで、私はコンセントから電源を切る。なにも特別に嫌いだからではなく、節電が今夏の最重要課題だから。少しの光熱費が惜しい。

なにを隠そう、私は足元宙ぶらりのフリーターだ。足どころか半身以上は社会から浮いている。こう言うと人間のクズみたいに思う人がよくいるが、こっちにだって一応の事情はある。

一度は全うに就職したのだ。そして、それなりとはいえ仕事も自分に課された分は無難にこなしていたつもりだった。だが地元の零細商店だったため、経営不振を理由にものの二年で突然解雇になった。競合企業との価格競争に耐えうらなかったらしい。

それが今年の三月。目下のところ求職中である。なのだが、どうにも一度落としてしまった腰は重い。就職サイトで企業を調べるまではしても、履歴書を書くまで至れないでいる。ようやっと書き出しても、志望理由や自己ピーアールの項目で詰まってしまい、最後までは埋まらない。もう失業手当も出ていないのに、だ。飽き性、熱しやすく冷めやすい都会のコンクリートみたいな性格の私。やがて「なら、いいや」と放り投げてしまうのだった。

ミニテーブルの上には書きかけで頓挫した履歴書が何枚も重なっている。上の方になるにつれて、つまりは新しいものほど書いていることが少ない。一番上のものなんか「桜田奈美」と名前を書くところ、間違えて「履歴書太郎」と書いてしまってそこでやめていた。そんな残骸たちを尻目に、私はスニーカーを引っ掛け家を出る。夕方には帰るから、と傘は持っていかないことにした。荷物になるし、コンビニなどに忘れて帰ってきて再購入するまではもはや恒例行事だ。

なにも家では満足に履歴書が書けないからカフェや公民館で、というのではない。それだけの行動力があれば、とうに新しい仕事を見つけている。違う。全く別の、それも暇を持て余したフリーターぐらいしか出来ないような進行形で好んでいる趣味のためだ。

家から徒歩数分の一般道から、曲がり木で作られた入口に背中を屈めて中へ入る。まるで秘密基地にでも来たような入り方。だが、中はむしろ辺りの道よりずっと開けている。

緩やかなスロープを下れば、そこは流れのおだやかな河川とそれに沿って作られた河川敷だ。私の趣味というのは、ここで時間を過ごすこと。

傾斜のある芝生部分に身を預け、日がな飽きるまでなにをするでもなくただいるのだ。大体いつも日が暮れる手前くらいまでずっといる。資格の参考書を眺めることや、弁当を食べることもしない。

強いてなにかというなら、「探しもの」をしているのだけど、自分でもそれが一体どこのどんなものかすら分かっていない。それは漠然としていて、影は見えるのだけど蜃気楼のごとく形がなく、やみくもに手を伸ばしたらあとも残さないで消えてしまう。安易なB級推理小説のように手ごろな手がかりも見つからない。

どうせ見つからないのだから、無駄な努力はしても一緒。最近そう思うようになった。だから川が息するのをただ肌で感じ、ぼーっとかもめが飛ぶのや鳩が群れなすのを眺める。マイナスイオンで涼むことで、熱気が篭って外より暑い部屋から逃れ、クーラーを使わないで済む効果もある。フリーターにはうってつけの趣味というわけだ。

私は川の真ん中に浮かぶ楕円、縦に細長い人工岩の前に陣取って寝転ぶ。ここは私の特等席だ、先客がいなくて安心した。

つい最近知ったことがある。あの楕円が、どうも噴水らしいということだ。

駅前の観光案内板に紹介されてあるのを見て、もう五年以上近くに住んでいるのに初めて知って驚いた。けれどそれもそのはず、一度も噴水として機能しているところを見たことがなかった。

その名も、ビッグウォーターバード。名前から鑑みても、装置のサイズからしても、よっぽど大きな噴水らしい。市のホームページを調べてみたら端の方に一応乗っていて、毎時正刻から十分ずつ演出があるそうなのだが毎日通っている最近でさえ一度もお目にかかれずいる。

今はもう動いていないものなのだろう。たぶん私と同じ、経費削減で止められたのだ。「近年、市の財政状況が危ない」と選挙演説で若い候補が訴えていた。これは、本当は立派であろう羽を他人の諸事情で伸ばせなくなった水鳥だ。そう思ったらシンパシーを感じた。

動かないのは分かっている。けれど、「もしかしたら」とほとんど落ちそうなくらい頭の隅のほうでは期待しないでもない。その淡い期待はいつしか私の変な探しものと重なって、これが動いたならすんなり見つかる気さえしている。

私はいつも一人でここにいる。たまに話すとしても、犬の散歩をさせている高齢のオジン。「今日もまた暑いね」と、一言交わすだけだ。フリーターになって三ヶ月目、中々近寄りがたい雰囲気でも発現してきたのかもしれない。夕方にサッカーをしにくる少年たちは、絶対に私の近くには寄ってこない。ボールが私の方にてんてん跳ねてきたときは、じゃんけんに負けた気の弱そうな男の子が取りに来て怯えて帰っていった。不審者に思われている。自らを顧みれば、それも無理のないことであるが。

はっと気がついた時には辺りがオレンジ色に染められていた。眠ってしまっていたらしい。首を上げ伸びをして、まだまだ陰りなく高い青空に欠伸を乗っけた。

時計を確認しようとも思ったが、たったそれだけの動作が面倒だった。まだいいや、もう少しこうしていよう。そう思って、頭をもう一度芝生に預け目を閉じる。

「もうすぐ雨が降るみたいですよ」

その少し後、誰かに話しかけられた。いつものオジンの声ではなく、若い男の声。私が眠気まなこを開けると、そこには背の高い男が立っていた。寝た状態で見上げたから、まるで巨人のように見えた。

焼けてオレンジの肌の感じからして二十代後半くらい。髪は短く切り揃えられ、清潔感があった。下は黒色のスーツパンツに、上は汗が滲んで色の濃くなった薄紺のシャツを着ていた。

「そういえばそうでした」

「えぇ。天気予報で言っていましたから」

「そうですね。ありがとうございます」

空を見上げてみえる限りでは、降りそうな気配もしないがどうなのだろうか。あの水着で傘で晴れの女の人が言っていたことは。真偽はいざなってみないと分からないが、素人の私が空を見ただけで判断できるものでもないのは確かだ。帰ることにして、立ち上がる。

立ってみても男は私よりずっと大きく、頭のてっぺん、つむじを見下ろされるくらいはあったので、軽く百八十はあるなと立ちくらんで痛む頭でぼんやり思った。服についた芝を払い落として、頭を下げその場を去る。それで終わりと思っていたのに、

「ここにはよく来るんですか」

なぜかその男は私の後ろをついてきた。大きく縦長の影が、私の影を呑み込むように覆う。

「えぇ、まぁ」

「なるほど。なにか目的でも？」

「とくにないですが」

私はなんと話したものか分からず、とにかく怖かった。早足で歩いて振り切ろうとするが、影は私を包んだまま一向に離れない。これが俗に聞くナンパや勧誘というやつなのだろうか。地味に生きてきたものだから、こういったことへの耐性がなかった。もちろん対処法も。

「あの、私を狙ってもいいことありませんよ」

「いやいや、そんなつもりは」

「じゃあなぜついてくるんですか」

私はここで足を止めて男の方を向く。まだ怖さはあったが、このまま家まで着いてこられたらと考えたら、もっと恐ろしい。思い切ってここで正面からきっぱり断りを入れるのがいいと思った。

しかし、拍子抜けする。男は大きな身体を小さくすくめて怯えていた。私以上に怖がっているようにすら見えた。

結局私がなにか言う前に男が喋り始める。

「……僕と同じかと思いまして」

「……私はあなたのようなストーカーではありませんが」

「僕もですよ。断じて違います。僕もこの河原によく来るものでして、それで……」

　男は証拠とでも言わんばかりに、スマートフォンで撮られた写真をスライドしながら見せてくる。何枚も撮られたほとんど変わらぬ川周りの景色、だからといってなんだと言うのか。今のうちなら走れば逃げられるかもしれないと頭には浮かんだが、見ていて一つどうしても気になる疑問が浮かんできていた。

「……あの噴水が上がったのを見たことは？」

「噴水？」

「えぇ、あの川に浮かんでいる岩です」

「……いや、ないです。あれは噴水だったんですか」

　しかし、期待はずれ。見たことばかりか、存在すら知らなかった。男はスマートフォンをしまって、言葉を継ぐ。

「僕は探しものをしています。あなたももしかしたら同じかと思いまして」

「はぁ、失し物ですか」

男は夕日を浴びて、きらきら光る水面を見据える。それは、川の中やここらに落としてきたという風ではなかった。私と同じように不確定のなにかを探している様子。

「えぇ、まぁ。どうでしょう、あなたは」

「職なら探していますが」

「……え？」

自虐テイスト増し増しの身を削り刮いだ返事、不発。冗談でめかした表皮になんて一瞥もくれず、真皮さえ透かしてさらにその奥に隠した本当を男は見ていた。

「いや、あぁなるほどと思いまして。私もそうですよ」

私は正直に答える。なにか嘘を言ったところで、その嘘は通じないだろうと思った。その嘘の裏側までこの男にはきっと見えて透いている。

「なら、仲間ですね。またここに来ますか」

「……そのつもりですが」

「では、またお会いしたらその時はお話ししましょう」

男はそう言うとすんなり去っていく。本当に勧誘でもナンパでもなかったようだった。なぜだろう、逆に悔しい。

　　　　　♢

最初に件の河川敷に来たのは三年前の早春のことだった。

今でもはっきりと覚えている。日付や時間はもちろん、風や川の音、メトロノームが壊れたみたく不規則に鳴った胸の鼓動まで。

全てが特別で、夢か幻かと思った。小説のシナリオの中に私がいて、いつもは端役の私がその時だけは主役だった。ほとんど真っ暗な背景なのに、舞台の上でスポットライトを浴びたような気分で、月や星までが私に注目していた。

ちょうど三回目のデートの終わり際だった。相手は当時通っていた大学の一つ上の先輩。学部が一緒で、講義のことや研究のことを教えてもらう内に仲良くなった。はじめは放課後にご飯を一緒にする程度だったが、それがいつしか休日に連れ立って出掛けていくような関係になっていた。

この日は都心まで出て行って高価そうなフレンチディナーをご馳走してもらっていた。帰りに私の家まで送ってくれると言うからお願いしたら、河川敷に連れてこられた。

ここまでこれば、初心だった私にも「流れ」でどうなるか分かった。初めて入り口のアーチをくぐったら、今までないくらい胸が跳ねた。だから、私はこの人が好きなんだろうなと思った。そこからしばらく二人の思い出を語り合って、終わったら先輩は真剣な顔で私を見つめて言った。

「好きだ、付き合ってくれ」

　人生で初めて告白を受けた瞬間だった。私はうなずいて腕の中に収まった。

彼の肩越しから見えた川面には、対岸に立ち並ぶ高層マンションが反射していた。それはまるで空への光の階段のようで、幸せだけが眠る場所へと続いていく気がした。

　　　　　♢

次の日、私はまた河川敷に行った。結局、昨日は雨が降らなかった。今朝の天気予報で雲が渦状の気流に流されて、天候が変わったのだと例のお天気ナレーターが釈明していた。一転、今日は夜まで快晴らしい。それに合わせて水着も赤。トップが繋がっているもので、派手な柄の日傘を持った姿はまるでレースクイーンみたいだなと思った。

いつも通りだった。一方的に仲間認定されたあの男のことは、頭によぎらないでもなかったが来ないなら来ないで平和だなと思っていたし、こだわるほど関わりがあるわけではなかった。

それよりも考えていたのは、探しもののことだった。男に言われて改めて意識せざるをえなくなっていた。私はなにかを探している、いつか落としてしまったなにか。それがここにあるような気がしている。

今日は寝られなかった。ぐるぐる進んではいつの間にか一周して同じところへ帰ってくるトーラス構造みたいに考えごとがめぐった。答えは出なかった、時間だけが泡になって弾けて消えた。

「一日ぶりですね」

昨日の男が話しかけてきたのは、それも終わり帰宅しようという時刻のことだった。空腹だったから、帰ったらなにを食べようかと考えていたので少し遅れてから、「えぇ、こんにちは」と座ったまま挨拶をした。男が私の隣に座る。スーツのままなのに、躊躇いもなく尻を芝生に預けてしまうのは私には出来ない荒技だ。

私は横にずれて少し距離を空けた。勧誘やナンパでないと分かっただけで、別に心を許したわけではないから。電車で他人と距離を取りたいのと同じである。

「仕事が早く終わるのはいいですね」

「あぁ、お仕事。ご苦労様です」

「ありがとうございます。今日は早く切り上げたんですよ、ここにくるため」

「情熱的ですね」

「えぇ、すっかり浮かされています」

男が苦笑いを浮かべる。それは川に掛けてか、と聞きかけて飲み込んだ。違ったら私が恥ずかしいし、馴れ馴れしい。

「そうですね」

「あなたこそよっぽどです。今日、噴水は？」

私は首を振って答えた。今日はずっと起きていたが、やはり微動だにしていなかった。

「……そうですか。それにしても、まさかこんなにすぐにお会いするとはゆめゆめ。毎日来られているのですか」

「ここのところはずっと」

「皆勤賞ですね」

「なにも貰えませんけど」

このところ、雨やアルバイトなどの用事がない限り欠かさず毎日。時間だって毎日三、四時間以上はいる。その分、川の色々な姿も見てきた。光の粒を反射して煌めく川、雨で増水して濁った川、そして忘れもしないあの夜の川。

しかしこれだけ知っても、なくしたはずの探しもののヒントすら貰えない。噴水も見られない。川は冷たい奴だ、季節に関係なく。

「それならいいものを差しあげましょうか。と言っても、粗品ですが」

「…………え？」

男が縦長のビジネスバッグを開いて探る。私のほぼ空っぽのリクルートバッグよりずっと重そうだと思っていたら、

「うち食品加工会社でして。菓子を作っているんです」

麩菓子を手渡してきた。駄菓子の中でも派手さのない、どちらかといえば渋さの光る硬派な菓子だ。全く思わぬ「賞」に面食らってしまって、呆然としたまま受け取ってしまう。

「……えっと」

「どうぞ食べてみてください」

よく知らない人からものを貰うな、とは小学生から老人まで共通の常識である。

だが、もう受け取ってしまった。もう一度男の顔を確認する。柔和に笑んで少し歪んだ歯を見せるこの男が、うまい嘘をつけるような悪人とも思えなかった。

それに、封もしてあるのだ。危険なことはあるまい。なによりいつ鳴ってもおかしくないくらい胃の中が空っぽだった。私は袋を開けて一口。

「甘いですね、ふんわりして」

「黒糖風味です。うちのロングセラーですから」

　人前でいけないと思いつつも空腹には逆らえず、最後まで食べきってしまった。

「そんなに気に入ったなら、いくらでも」

ビジネスバッグから大袋に入った麩菓子が味違いで何袋も出てくる。重厚なバッグにそれだけしか入っていないとしたら私のリクルートバッグより軽そう。

「尽きたら今度は自分で買っていただけると」

「……さすがにこんなに悪いですよ」

「いやいや、一種のセールスですよ。商品宣伝です」

また私は突き出されるままに受け取る。とは言えど、だ。見知らぬ他人にこれほどものを貰ってしまうのもいかがなものか。無料ほど怖いものはないと言う。少しだけ迷った結果、

「すいません、ありがとうございます。いただきます」

貰うことにした。貰えるものは貰っとけ精神が、遠慮に勝った。わざわざ良質な紙袋に入れてくれたのを受け取る。百貨店などに縁のない身だけに、これも嬉しかった。

「あまり気になさらず。支給されるものなんですよ、それにそうでなくても大した単価じゃない」

「なにかお返しができればいいのですが……」

ここまでして貰うと、貧乏人根性がシミになって色を成したような私だって、引け目はある。身内ならともかく、昨日知ったばかり、ついさっきまで疑っていた相手だ。

「ははは、いいですよ」

「……さすがにそういうわけには…………」

だが代わりになにか、と言われれば私はフリーターである。言葉の末尾が濁ってしまうのは、その部分だった。

人様に施しを受けることはあっても、逆はない。貯金は去年まで積んできたものを段々切り崩していくだけ、インフレで目減りもしている。

「そこまで言うなら……もう少し一緒にここにいてください。一人で見ていると急に寂しくなっていけない」

「そんなことでいいんですか」

「はい、僕には十分」

　欲のない男だと思った。

そのあとはほとんど喋らず川が流れるのを眺めた。長年連れ添った老夫婦みたく会話をしなくても場が持って、「また次会うことがあれば」と言いあってから別れた。

　　　　　♢

特別というのはずっと続くものじゃない。

長く平板な普通の時間があってほんの一瞬をやっと特別と呼ぶのだ。

それに気づいたのはその先輩と付き合い始めて一カ月もたたない頃だった。

河川敷で告白されたあの日、この先は延々と光に満ちた道が続くものと思っていた。恋愛とはそういうもので、私の世界ぐらいまるごと変えてしまう力があると信じていた。

が、慣れてしまえばその力もどうということはなかった。私が彼を好きで、彼も私を好き。だから付き合っていて、とりあえずは日々を一緒に生きている。その事実だけがそこにあった。

四月になると彼は一般企業に就職をした。幸いにも勤務地はここの近くで、私たちは関係を続けることができた。

けれど会う時間は付き合う前と比べて極端に減った。彼は朝から夜まで仕事に精を出していたし、私は就活に奔走していた。だから会うのは週末の夜、決まってお互いどちらかの家で。

彼が私に会って最初にこぼすのは、大抵「疲れた」「しんどい」などのネガティヴな言葉だった。私は私で「そうだね」と返す。社会で生きていくのはひどく大変なことなのだろう、と思わされた。

ご飯を食べて、お酒を飲みながらテレビを二人で見る。酔いが回ってくると、彼は嫌なスイッチが入った。

「使えない上司のくせに指示ばかり大声なんだよ、これが」

仕事の愚痴、

「俺は高校でも大学でもずっとトップクラスの優等生よ？　何処の馬の骨かも知れない使えない男に命令されなくちゃいけないのって話で。試験も上から十番切ったことないんだって」

自分の昔話、

「本当はもっと上の大学も企業も行けたんだけどさぁ。本番一発勝負で、運がなかったの。旧帝大も余裕で──」

もしどうだったら、の仮定話。

彼より私の方がお酒に強かった。ほとんどシラフの状態でこれらを聞くのは耐えられないぐらい酷なものだった。

「でも、奈美に会えてなかったって考えればこれでも良かったかな。ほら、こっち」

そして、そこからなぜか情事の流れになる。ちぐはぐな接ぎ木のよう。

今考えれば最悪の迫られ方なのだが、「恋」というのは恐ろしい。テレビの音量だけを下げる。そのまま寄せられてキスをしたら、一気に性のパトスが身体中に巡ってもうその気になっている。舌を入れられ、入れ返す。服を脱いでしまったら、あとに残っているのはもう感情と感覚だけ。

気づけば朝になって、月曜日が始まってまた週末になっていた。

　　　　　♢

　あの日以来、男と私は同じ時間を河川敷で過ごす機会が増えていた。

私は変わらず毎日のように通って、男もよっぽど出張などがない限りは足繁くやってきた。益になることもないが、害になることもない。挨拶を交わしたら、きまって「今日の噴水も動かないですね」から会話を始める。それくらい全く動かなくて、それと同じように失くし物が見つかる気配もほとんどなかった。

　時には世間話も身の上話もした。他に結びつくしがらみがないから、反対に枝葉のことから根幹のことまで話すことができた。どうしようもない所感を言い合って笑い、たまには真面目に生活の話もした。

私がフリーターと知っても「世の中そういうこともあります」と含みのある神妙な顔で言うから、「仙人みたい」とこっちが笑ってしまった。人からしたら、お笑いものだと思っていたから救われた気分にしてくれた。

無理に話すことはしない。途切れたら川の流れを眺めて、会話の代わりにする。

私が探し求めているものとは別物だったけれど、悪くないものではあった。このまま自然と付き合うようになったら素敵だなと思うようになっていた。

　そんな日々が続いていて昨日、ついに男がデートに誘ってきた。その誘い方は、

「男一人だけでは行きがたいところがありまして、一緒に来てはもらえませんか」

　という曖昧で遠回りのものだった。思ったことはなんでも言ってしまうのが生来の悪癖である私は半ば反射的に問い返す。

「それはデートのお誘いですか」

　これだけは聞いておかねばなるまいと思った。自分だけ変に期待してしまってからでは遅い。川音が一枚だけ間に挟まったあと、

「そう捉えていただいて結構です」と。

　こうしていとも簡単に初デートが決まってしまった。

「どうかしましたか」

「いえ、えっと……なにも」

デートだ、と私の胸は昨日からずっと期待に膨らんでいた。バストそのもの自体はパットを入れて盛り上げたのは秘密である。

だらしなさの権化たる私の部屋に埋もれていた限界の洒落服に、無臭清涼剤リキッドをこれでもかと吹きかけ臨時消臭。香水を一滴振ったら久々に女になった気がした。化粧はばっちりメイク。コンプレックスであるエラはシェーディングパウダーを塗り込んで隠して、一重まぶたは二重にアイプチ、逆にチャームポイントであるふっくらした唇は薄くだけ紅を塗って自然感を演出した。あとはヒールを履いて完成だ。

まさにおめかし、完全体。それだけに、困惑していた。

「そうですか。では犬を借りに行きましょう」

「はぁ」

行きたい場所というのがドッグランだったのだ。大方ほんの洒落た喫茶だろうと高をくくっていたから、頭から冷や水をかけられた気分。たしかに男一人では訪れにくい場所かと言われたらそうな気もするが、それならそれで先に言ってもらいたかった。

当日になって「大丈夫ですか」と聞かれたら、「はい」と答えるしかない。

近くにあるのは知っていた。昔大きな遊園地があった跡地があまりにも広々としているから、そのまま芝を引いてドッグランにしたらしい。ペットを飼っている人はもちろん、飼っていない人も犬を借りて散歩させたり走らせたりできる。

男は先に受付を済ませていた。運動する気満々のようで、格好もシャツ一枚にジーンズと軽い。フル装備の私とは対照的だ。スーツ以外で見る初めての男の姿だった。

店員からチワワを預かったら、少しこわばっていた男の表情がほろろと崩れていった。

私は迷った挙句、一番毛の長いヨークシャテリアの「くぅちゃん」を首輪のついた紐と一緒に借りた。

選考基準はひとえに鈍そうだったから。あまり走りたくなかった。靴がブーツスタイルだったし、化粧が崩れると悲劇になるのがばっちりメイクだ。

そう思ったのがくぅちゃんには見え透いたのか、想像していたのとかけ離れた野太い声でバウと吠えられた。くぅん、と鳴くのだと思っていた。

誘導されるままゲートをくぐってドッグランの中へ、まず「へぇ」と感嘆が漏れた。両脇に樹木の並ぶ林道や、小さな隆起の続く砂丘、もちろん芝生。よく言うみたく東京ドーム何個分もないが、私立小学校のグラウンドぐらいはあって広さは十分確保されていた。

「では、まずは散歩をしましょうか」

「……えぇ」

男がしゃがんでチワワを放すのを見て同じように、私はくぅちゃんを放す。私が立ち上がる前からくぅちゃんが走っていこうとしたから、身体ごと持っていかれそうになる。

「元気な犬ですね」

「ありがとうございます、助かりました」

それを男が腕を回して止めてくれた。腕毛が適度に生え、山と谷のはっきりした筋肉に少しどきりとした。

本当は大人しくて素直なのを借りるつもりだったのだけど。

興奮気味のくぅちゃんは、紐を千切っていかんばかりに暴れていた。チワワの方が大人しくてよかったかもしれないと思いつつ、私がなんとか引っ張ってそれを抑えていると、

「あまり強く引っ張りすぎるとむしろ抵抗するものです。少し力を抜いた方がいいですよ」

「……なるほど」

言われる通りにしたら、くぅちゃんは本当に暴れなくなった。

「犬の心理です。まぁ人間とほとんど変わりありませんが」

「お詳しいんですね、二度も助けてもらいました」

「雑誌の受け売りですよ」

男は笑いながら言う。照れたのか、後頭部に手を掛けていた。

「そこまで好きならご自分で飼われたら？」

「もちろん飼いたいとは思っています。でも、今のマンションは禁止で」

「あぁ、そういう」

「来年には昇進、昇給予定なんですよ。そこでペット可の家に引っ越そうかと」

足元に擦り寄るチワワを抱え上げて垂れた耳を撫でる。くぅちゃんは、私のことなんて知らんぷりで地面の石ころに構っている。

「まぁ、来年の話なのでどうなるかは分かりませんが」

「ちなみに飼いたい犬の種類は決まっているのですか」

「チワワですね。不器用な私にもすぐ懐いてくれる」

しばらく散歩をした後は、首輪を外して走らせて遊んだ。一緒に走らなければならないかと思ったが、フリスビーを投げたら勝手に走って取ってきてくれたから楽だった。

他のどの犬より軽快に走るくぅちゃんを見ていたら、飼い主でもないのに誇らしい気分になった。

そのあとベンチで休んでいたら、騒ぎ疲れたのかくぅちゃんが膝の上に乗ってきた。邪魔はされたくないが全く不干渉なのも不満らしい、とんだじゃじゃ馬だ。

慣れないことをしたから河川敷にいるより時間が過ぎるのが早くて、すぐに夕方になった。惜しみながら犬と別れた私たちはごく自然な流れで、

「では喫茶で休んで行きましょう。少し遠いですがパンケーキが美味しい店があります」

「はい、パンケーキは好きです」

「僕もです。ここのは弾力が違うんです、どうでしょう」

「ふわふわが嫌いな女はいませんよ」

カフェに行くことになった。ここでようやく私には男の意図が理解できた。河川敷の外で会うのが初めてだったから空気をほぐそうと思ったのだろう。

たしかにその通りになって、カフェだけでは話し足りず、繁華街外れの小洒落た料理屋に流れた。赤ワインを飲んで、店内に流れるジャズに気分よく身を任せたら、今日の初めに思っていた以上に久しぶりのデートを満喫している自分がいた。

店を出たら、それ相応の雰囲気になるのは大人であるなら必然だったと言えるかもしれない。ネオンの光る道を二人で歩いていたら、両手を掴まれて

「嫌なら離してくれていい」

と言われた。見つめ返した彼の目は遊び半分ではなく、本気であることを語っていた。

「……えっと」

「どうするかは君次第さ。でも、できれば離さないでほしい」

「…………」

「探しものだって一人で探すよりいい。一緒にいたら見つかるかもしれない」

近くに寄せられた彼の唇が動くのだけが時間に取り残されるみたいに言葉より遅れて見えた。

キスをしたら、きっとこのまま付き合うことになる。まさに望んでいた、素敵だと思っていた筋書きの通りだ。

そのはずなのに、心がどうしてか釈然としない。

ここでキスをしたところで、探しもののきっかけにもならないだろうと思った。だって今までどれだけ時間をかけても見つからなかったのだ、こんな即席の恋で見つかるわけがない。

せいぜいなれてとりあえずの代替品。

だが、もう見つからないだけの探しものにも疲れてしまっていた。なら、いいでしょう。減るほど、私のキスは特別なものでもないし。

唇が触れる直前、そういえば名前も聞いていないなと思った。だがもう遅い、寄せられた唇にそのまま唇を重ねた。

　　　　♢

付き合い始めてから一年経った頃、私も就職した。

今の家から徒歩で通える地元企業の事務職。彼の弁を借りてくるなら、本当はもっと名の知れた企業の内定もいくつか貰っていた。だが、それらは全国転勤や営業職。

彼が「離れたらおしまい」「営業は大変、男に狙われる」と言って聞かないから、滑り止めの滑り止めで受けたその職についた。

私が仕事に就いてからも大きく関係は変わらなかった。平日はメールのやり取りや電話をして、週末になると会った。

ショッピングをしたり、観光に出かけることもあったが、夜には結局身体を重ねた。幸せというほどではなかったが、不幸せでもなかった。

喧嘩をすることはしばしばあった。性格がそもそも反対で、彼はどうも厳格で、私は適当だった。

元々押しの強い、逆に言うなら気の荒い彼氏だった。暴力は振るってこなかったが、語気を荒げて怒ることはあった。

独占欲が強くもあった。些細なこと、例えば週末に友達との先約があって会えなかったり、疲れてメールを返さないままいたら怒った。

他に私を欲しがるような物好きなんていないのに、ちょっと男友達から同窓会等の業務用メッセージがあっただけでつむじを曲げて機嫌を悪くしていた。

私は私で面倒な奴だった。筋の通らないことは嫌いで、厄介ごとになると分かって言い返してしまう。感情論と理屈論。いくら言い合っても、まともな答えは出ない。

それでも適度なところでやめて、折り合いをつけて過ごしていたのだ。

私が仕事をクビになるまでは。

「仕方ないさ」

無職になってすぐは彼もこう言ってくれていた。しかし、その言葉に甘え、自堕落に陥った私は中々次の仕事を見つけられなかった。アルバイトもせず、家で家財と同化して埋もれて過ごした。

部屋の中は荒れた。これまでは学校や仕事であまり家にいなかったから、掃除をしなくても適度に綺麗だったが、こうなると汚れるのはすぐだった。

「奈美、いい加減に綺麗にしろよ」

汚くなっていく部屋とともに、彼の言葉は尖っていった。明らかに雰囲気は悪化の一途を辿っていた。

「お前さ、駄目なら駄目で努力くらいしろよ」

繰り返される叱責は、導火線に火がついたよう。

「ゴミと一緒だぞ、今のお前」

「本当、どうしようもない女」

もちろん事の発端はなにもしない私だと分かっているつもりだった。だから、なにを言われてもずっと堪えた。

ここまで言われると、さすがの私も仕事を探そうと努力した。けれど、見つからない。エントリーシートを送っただけで何社も落ちた。彼はそんな努力を見てはくれなかった。

「もっといいところ就職しておけば良かったのにな、無能でもクビにならなかったのに」

そして、私の方にも限界がきた。

そもそも彼がわがまま言うから、今の職に就いたのだ。それは理路が通っていない。溜まっていた分、全てが怒りに変わった。

セックスなんて気分には全くならなかった。

　　　　　♢

あの日、男は私の彼になった。

名前はキスをした後にやっと知った。水谷朋未、私の四つ上。体躯に似合わず女みたいな名前だった。

ほとんどその場の勢いだけでしてしまったキス、大抵こういう突飛な出来事から始まる恋はろくな展開にならない。彼の本命が現れ、関係破綻、爛れた関係だけ残ってしまう、といった悲惨な末路を辿るもの。

しかし、これが上手くいきすぎて怖いくらいに首尾よく事が運んだ。彼が真剣に私とお付き合いしてくれたのはもちろん、一緒になってから悪玉が詰まって回りの鈍かった歯車が急に転がりだすように物事が次々と好転していったのだ。

まずスペースが空いているから、と彼の家に居候同然で同居するようになって独り身の荒んだ生活とはおさらば。そこへきて、前の職場が好況で人手が足りないと春から雇い戻してくれることになった。

まさに順風満帆、今まで吹いていた向かい風が全て追い風に変わったようだった。それは今も。

私は風に背を押されて少し手前、彼の手を握った。未だ見つからない探しものの代わり、と捕まえた手。それが代わりだったことなどほとんど忘れてしまって、その温もりに本物を感じて満足している私がいた。

「どうかした？」

「いいじゃないですか。寒いです」

「たしかに。真冬の夜だから。これだけ寒いなら昼でもよかったかもしれない」

「まぁこういうのは習わしですから」

手を繋いだまま歩く。寒さもそうだが、そうしていないと逸れそうになるほど辺りは人でごった返していた。

新年を迎えた元旦の夜だ。町の小さな神社の参道にも的屋がずらりと並び、除夜の鐘が荘厳に鳴る。もう何回鳴ったろうか。

漸進的に前へと向かっていた列がやっと無くなって、本殿にたどり着く。賽銭を入れたら二礼二拍手一礼、願いごとをする。

この先一年、仕事もプライベートも上手くいきますように。漠然としているが、こんなもの。なにか他に願いごとがあった気もしたが、いざ願うとなるとはっきりと思い出せなかった。

一通り境内を巡ってから帰路を下っていく。途中焼きそばを頬張り、りんご飴をお土産に買った。深夜には禁忌の高カロリーだったが、祭り事でぐらいは許されるはずだと自分に言い訳した。あとは帰るだけ。

だったのだが、

「先でなにかあったみたい」

一向に進まない。

サイレンの鳴る音がしていた。警察沙汰でもあったようだ。

「困った。戻って別の道に行こうにも混んでるから、待つしかないね」

「ただ待つのもつまらないですね」

「じゃあ…………そうだな、あの小屋でも入ろうか」

彼が指さしていたのはプレハブで建てられた占い屋だった。端のほつれた布生地によく目を凝らせば、手相、姓名他とマジックペンで書かれてある。

「占い……、よくやられるんですか」

「僕はこれまで一度も」

「私もです」

「試しにだよ。いい時間潰しになると思わないかい？」

改めて布に書かれた案内を見る。

この類はどうも胡散臭くていけない。昔の友人には占いごとを好む人もいたけれど、私自身は見てもせいぜい朝の星占い程度の人間だった。

それすらも根拠が血液型や誕生日というのが気に入らない。世界中に何人同じ運命を辿る人がいるというのか、と思ってしまう。

「私、占いはあまり信じないのですが」

「僕も。まぁいわば、遊びみたいなものさ」

しばらく言い合ってから、それでもまだ進む気配のない参道の膠着状態を見て結局入ることにし、私たちは破れかかった布をくぐる。

中にはいかにも占い師といった服装と髪型の四十路程度の女が一人、鉄パイプの椅子にでっぷりとした身体を沈みこませて座っていた。微妙に暗さを演出する黄色の灯りも相まって、雰囲気があった。

「どうぞこちらへお座りください」

作ったのか、地声なのか分からないが見た目と不釣り合いに高く綺麗な声。その通りにしたら、私たち二人を交互に見比べて

「カップル様ですね、では相性も見ましょう」こう言った。

もういい大人なのだが、こうして改めて人に言われると照れくさい。

「ではお名前をお書きいただいてよろしいでしょうか、あぁなにも悪用するわけじゃないですよ」

彼が慣れた様子で名前を書く。仕事をしていたら書くことも多いのだろう、綺麗な字だった。

かたや私はもう履歴書すら書いていないフリーター。整っていない字を隣に書くのが恥ずかしかった。

「次は左の手のひらを見せてもらえますか」

占い師は、差し出した私たちの手を少し握って数秒ずつ見る。そのあとに手元のメモになにか殴り書いたあと、

「まず彼氏様の方ですが、穏やかで勤勉な方といったところでしょう。お仕事の方は会社勤めなら、一定程度の成功はほぼ約束されていると言っていい」

饒舌に喋り始めた。

「プライベートも充実しています。今年はいい巡りが来ていますよ、手相では結婚線が綺麗に薬指に分かれていますからもしかしたら祝い事もあるかもしれません」

私はよかったねと彼の足を軽く膝でつつく。結婚だなんて考えも及ばないことだったので、なんとか軽いコミュニケーションで有耶無耶にしたかった。

「彼女様の方は、運の巡りでいうならもっといいですよ」

「え、本当ですか」

「去年はあまり良くなかったのでは？」

「あ、はい……実は会社をクビになって」

「では、今年は再就職ですね」

まんまと言い当てられて私は驚く。やるではないか、占い師。ついさっきまで占いに抱いていた不信感がもう消えかかっていた。

「本当文句なしでいい。やるべきことをやっていたら、必ず全てが良い方向に向かっていきます。一日一日しっかりと仕事をこなせたら年末には大きなチャンスが回ってきます」

「へぇ」

「ただ気分屋で気まぐれなところがありますから、その辺はモチベーションの維持は必要ですね。それが可能なら昇給昇格はもちろん、それ以上も。仕事線が運命線手前で止まっている一番いい状態です。

プライベートは、それこそ小指下あたり結婚線がはっきりと出ています。今年を逃したらそれ以上がないくらい」

思った以上に褒め言葉が続いて、私は自分の手のひらを見る。このなんの変哲もない皺が、そこまでのものとは思わなかった。

「お二人の相性もいいですよ。真面目な人同士だと駄目にしてしまうのが彼氏様、適当同士だと全てが適当で終わってしまうのが彼女様。

お互いを補い合って且つ相乗効果もあるかと。結婚するなら、今年がいいですね。二人ともいい線が出ることは珍しいんですよ」

私たちは顔を見合わせる。せっかく一旦はお茶を濁せたのに。気恥ずかしくて、私たちはお互い目を逸らした。

そこからもしばらく占い師の話は続いた。終わる頃にはすっかり占いへの疑念が薄れていた。

最後には話している間に見たというオーラから来世がどうなるかまで教えてくれた。彼が「狡猾な蛇」になるだろうと言うから面白いと笑っていたら、私は「今と似た人間」になるのだそう。それはそれであまり嬉しくないな、と思った。決していい生活を送ってきたわけじゃない。来世があるなら、せめて仕事をクビにならないようにしたい。

「いいことばかり言われましたね」

「当たるも八卦当たらぬも八卦だから、気を抜かないようにしないと」

小屋を出たら、規制は解除されすっかり人の数は減っていた。夜はさらに深まって辺りは暗く、寒さは底をついていた。更けて朝がくるにおはまだ先らしい。

「えぇ、そうですね」

寒くないように、離れないように私はまた彼の手を握った。

　　　　　♢

喧嘩をしてもその都度仲直りをしてきたのが三年間だった。

だから今度もいつもより少し大きいだけで、収まるだろうと思っていた。「期待」というより、冷めた「予想」として。

もはやそこに恋情はなかった。けれど、ずるずると引きずってきた関係だけはあって、捨てるに捨てられないまま来ていた。

喧嘩をしてしばらく、連絡がぱったりと途絶えた。メールも電話も来ないし、私も意地になってしなかった。

それが二週間ほど経った日、彼から電話で連絡があった。明日の夜に、あの河川敷に来てくれと言う。

私は謝られるのだろうと思った。そうしたら、謝り返せばいい。もしくは逆でもいい。それでまた元どおりだ。私は言われた時間より少し前に河川敷へ出かけていった。彼は既に待ち受けていた。

「早かったね」

「あぁ」

告白された日と同じ季節、同じ場所。だがあの日とは全く違った感じがした。星ではなく、暗闇が私たちを見ていた。川はその内側に紛れて黙り込んでいた。

彼も返事をしたきり喋らない。

私はいきなりじゃお互い謝る流れにもなれないだろうと思って、どうでもいい世間話をしてみた。頷くだけでなにも反応してくれず、途中で

「真面目な話がしたい」

と遮られた。

その言葉を待っていた私も与太話をやめる。これで謝って終わりだと思ったら、なぜかまた思い出話が始まった。

淡々と、されどもの悲しそうに語られる彼の話を聞いていて、わたしは自分の大きな思い違いに気づいた。

これは仲直りじゃない、正しく「終わり」だ、と。

「俺は昔のお前が好きだったよ」

思えば彼の言葉はいつだって過去形で、

「お前に抱いていた気持ちは嘘じゃなかったと思う。けど、もう無理だ」

ずっと後ろを振り返っていた。

「もう終わりだ。別れてほしい」

最後の最後まで。

私は弱々しく頷いた。認めるしかなかった。彼はわざとらしく大きなため息を吐いて、私を残し歩き出す。

フラれた。惰性で続けてきた三年間、その果ての悲惨な結末。

けれど、川に一人残された私に残っていたのは、彼への気持ちや未練じゃなかった。

好きだったはずのその背中が遠ざかっていくのを見てもほとんど無感情で、自分でも驚くほど乾ききっていた。

呆然と姿が消えるまで見送って「あぁ終わりになったんだな」と口にしてみた。それでも悲しくなくて、涙の一滴も落ちない。

代わりに私を襲ったのは、なにかを失ったような両手の空っぽ感だった。失くした物が何かは分からなかった、でも確かに失くしていて竹の中のように不透明にぽっかりと私の中、穴を開けていた。

本当はずっと前から失っていたのだと思う。ただ、今まではカバーに覆れていて気づかなかったのだ。

家に帰るまでも、帰ってからも、寝て起きてもずっとその空っぽ感は付いてまとった。一旦忘れても、電車から降りる時や玄関を出る時にふと。指にかからず、いつかこぼれていったなにかの感覚が返ってくる。

私は探しものを始めざるを得なかった。突き動かされるように河川敷に帰ってきて、導かれるように動かない噴水を見つけた。

　そして、今の彼に出会った。

　　　　　♢

四月の仕事始めまで、あと一月を切っていた。

三月の陽気は三寒四温を繰り返しながらも徐々に温かくなって、芽吹きの春が近づきつつあることを思わせている。

私はせわしなく新年度の準備に奔走していた。猫の手も、ネズミの手も借りた上で、自分は休んでしまいたいくらい忙しい。自然、あの河川敷からも遠ざかっていた。だが、ここをぬかっては四月から思わぬぬかるみに足を取られるのだ。手抜きはできない。

手始めに、私はスーツを買いに行った。私の部屋で野垂れ死にしてしまったスーツはもはや型崩れして使い物にならない。バイトで溜め込んだお金を捻出して、形状記憶力のあるスーツを買った。試着をしてみたら、いよいよ社会復帰の実感がわいてきた。少し値段は高かったが、こういうのはいかに自分が昂ぶるかだ。その場で即決してサイズ合わせもしてもらった。まだまだある。

国民健康保険から会社保険への切り替え申請、印鑑証明の発行、健康診断などなど。

しかも、そこへきて彼が昇進するから犬を飼えるグレードの高い家に住もうと新居への引っ越しまで重なったのだ。幸い、距離は近い隣町。とはいえ、引っ越し準備はもちろん転出届や転入届、郵便局にも届け出なくてはならない。

契約や手続きでがんじがらめの世の中である。

一々、十まで読んで判子を押すのは面倒ではあるが、一文読み落としただけでもしかしたら法外な契約が盛り込まれているかもと思ったら、ちゃんと確認しておかねばならない。

この間は、賃貸マンションの壁床防虫コーティングを勝手に契約に加えられそうになった。たかが築二年の借家で、である。大人はお金になると汚い。

彼と近くに外食でも行こうとなったのは、それらがやっとひと段落した三月下旬だった。引っ越しをしたら、この辺りからは離れる。そういう時期になると妙に寂しくなって、せめて自分の足跡をここに残せたらと考えるもの。

普段はチェーン店にしか行かないのに、個人経営の隠れ家的なお店にも足を伸ばしたくなるのだ。私たちは勝手知ったる場所だと大した下調べもしないまま、とにかく行ったことのない店へ行こうと夕刻五時に家を出てきた。

が、揃って優柔不断な私たちは少し良さげな店を見つけても、

「いやいや、もっといいところがあるはず」

「そうですね、あとで戻ってくればいいですから」

なんて言ってどんどん店舗前を通り過ぎていく。

入りかけたドーナツ専門店は気分じゃないと直前で引き返し、乳牛家直営のソフトクリーム店も扉が無いから寒そうだとやめになった。決まり手はなくても、引き手はすぐに見つかる。

時間も微妙だった、川沿いに建つ店舗ビルはその大半が「closed」。晩御飯に、と入るには早かったし、喫茶でゆっくり、というには遅い。唯一よく行っていた小料理屋は、運悪くも休業日だった。

もうそれ以上の引き出しはどちらにもなかった。

「どうしようか」

「最初のドーナツ店にでも戻りましょうか。ドーナツ以外のものもあるでしょう」

「そうだね、それが懸命だ。コーヒーでも飲むことにしよう」

そう言いながらも、なんとなく歩を進める。これがいけない、戻るのも面倒になる。私は立ち止まって、この先になにか店があるのか携帯で検索をかける。会員登録をしていないせい、評価順に見られないので手こずっていたら

「…………噴水だ」

彼が呟いた。そのあと、すぐに興奮気味に私の肩を揺する。

「ほら、噴水！　あそこ」

「へ？　なにが噴水なの…………」

その時だった、私が川の真ん中から空高く飛沫が上がるのを見たのは。

衝動が足元から脳天まで私を突き通して巡った。そこから行動に至るのは早かった。

「あの場所、僕らがずっと見ていたところだよ。あっ、おい！」

気づけばもう走り出していた。あれだけ通った夏に見られなかったのに、どうして今になって。

探していた店のことなんてもう忘れていた。ドーナツもコーヒーもなにも今はいらない。私は彼を急かして、河原へと急いだ。

狭い木のアーチをくぐるのに減速した以外は、ほとんど全力疾走。運動不足の二十代半ばの身には厳しく、息も絶え絶えだったがそんなことは二の次だった。それより一秒でも早くと足を駆った。

やっと目の前にたどり着いたと思ったら、

「ちょうど終わったみたい……か。しばらく待とう」

もう噴水は既に止まっていた。少しの水が人工岩からこぼれ溢れるだけだった。息も絶え絶え、私たちは落ち着かない呼吸を昔の定位置に座って整えた。

「まさか上がるなんて」

「そうだね、僕も初めて見たよ」

「ホームページには一時間に一度は上がると書いてあったんだけど」

「去年の夏の話でしょう。それにしたって、一度も上がらなかったのに」

「とにかく次を待ちましょう」

「それがいい」

もうすぐ春分である。日が沈む六時はすぐそこで、川面には沈み際の大きな夕日がぷかんと桃より大きく浮かんでいた。その揺れる弦をぼーっと眺める。

なにを話そうという気が起こらなかった。そこからは、互いに無言でさっきまで高く水を吹きあげていたはずの楕円を見続ける。

邪魔をするものはいなかった。昼ですらいない人は、この時間になるともっといない。余計な音がなくて、しんとしていた。えんじ色の電車が轟音を立てて去って行ったら、水面が小さな衝突を繰り返しながら下流へと流れていく音だけ。

それ以外は遠くに見える車のエンジン音はおろか、噴水の下にあるだろうポンプのキュルキュル擦れる音もしない。

さっき見たのは、夢か幻かと思い始めるのは自然だった。目に映った瞬間、写真も撮らずに走り出してしまったから証拠もない。

待てど待てど、その状況は変わらなかった。風が運ぶのは噴水の音沙汰ではなく、少し肌に冷たい空気だけ。

それでも、

「このあとどうしようか」

とは絶対に言わなかった。私も彼も。

禁句だった。もしも言われていたら、それだけで恋が冷めてしまってもおかしくなかったと思う。

なぜなら、これが代替品から始まった恋だったから。

つまり、私は見つけていた。

あの曖昧で、無形の探しものを。

去年の初夏切に追い求めて、いつの間にか忘れてしまった本当の探しもの。あの時、毎日毎日探しても見つからなかったものが今まさに、私の手元にはあった。

簡単なことだったのだ。複雑でも難解でもない。

この瞬間だけ、河原で噴水を待つだけのこの何物にも引き換えられない、他人からすればガラクタのような時間だけでいい。

それでいいから、私は「今」が欲しかったんだ。

私がずっと求めていた探しものは、シンプルにそれだけだった。やれ「今夜は─」「明日は─」「来年は─」。なれの果てには、「来世は─」。そして、「昔は─」。世間様は、なにかにつけて後先のことばかり考えさせようとしてくる。確かにそれを考えるのは楽でいい、もちろん大切なことでもある。けれど、その代償に犠牲になっていたのはいつも「今」だった。

「今」を繋いで結んだものが人生のはずなのに、いつの間にか私は過去と未来を結んで生きていたんだ。誰かの思惑通りに。

安易なその線の中に埋没していた「今」を、いつの間にか誰かに奪われていたそれを、私は今取り返していた。しっかりと掴んでいた、手のひらの中には「今」があった。結局、噴水が上がろうが上がるまいがどっちでもよかったのだ。

ここで川と時間が流れていくのをただ眺める。

その時間に満たされていたかった。あの時は気づかなかったけれど、ここにいた私の手元には確かに「今」があったのだ。他のどこでもない、ほんの一瞬のうちに消えていく今ここで息をし、地に足つけて生きていた。探しものは、「今」だった。

空の雲がつづらになって、東の方へ流れていく。名残の薄橙が、雲とともに藍色の空に染められていった。もうすぐ七時くらいだろうか。やはり噴水は上がらない。

空の髪飾りをして二十七日目ほどの月が、雲にすっぽり覆われて隠れた。もう数日後には新しいのに生まれ変わるんだ、たぶんこれはその準備。もうあの月には会えない。でもそれでいい。

結局、どれだけまで待っても噴水はうんともすんとも言わなかった。

「もう行こうか」

すっかり空色に暗くなった彼が言った。無力感が声に滲んでいた。私は仕方なく諦めて、「今」を手放すことにした。この社会に生きている以上、ずっと握っていられるものでもないらしい。

また欲しくなったら、ここに戻ってくればいいのだ。たまにくらい許されるはず。

去り際、私は一度も噴水の方を振り返らず彼の横を歩いた。それでも耳はすませていたから、もう一度噴水が上がることがなかったのは分かった。

言葉少なだった。私はたぶん同じ考えごとをしているんだと思った。

手前の線路を右へ左へ電車がすれ違って行く。止まることなく先へ進め進めと、線路が揺れて鳴った。夏と冬では微妙に音が違うらしい。

今度は海にでも行こうか、彼が言った。川の流れに乗ったら明日の朝にはつくんじゃない、と返した。静謐のうちに輪郭の弛んだ彼が同意して笑った。

アーチ状に曲がった枝の下をくぐり抜けて、河原から出る。舗装されたコンクリートへ、すぐ近くの見えない明日へ、確かめるように一歩二歩。踏み出した。